「忍耐による命」

ルカ 21:12-19

2020.10.11 南与力町教会朝拝

序：

今日の箇所の前のところでイエス様は世の終わりの徴として様々なことを語られました。偽メシアが大勢現れること、戦争や暴動が起こること、また大きな地震や飢饉、疫病、さらには天からの大きな徴があることを教えられました。今朝のその後の 12 節以降を見ていきたいと思います。

１．弟子たちの迫害と証し（21:12-15）

21 章 12 節

「しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。」

「これらのこと」、すなわち終末の徴がすべて起こる前に、「あなたがた」すなわち弟子たちに人々は手を下し、ユダヤ人が集まる会堂や牢獄に引き渡す。そして「わたしの名」、イエス様の名のために、ローマ帝国の王や総督の前に引っ張られていく。そういう迫害が弟子たちに起こることをイエス様は予告されたのです。そして 13 節

「それはあなたがたにとって証しをする機会となる」。

「証し」とはイエス様を証しする、あるいはイエス様への信仰を証しするということです。弟子たちへの迫害は結果としてそのような証しの機会となるいうことです。そのようなことがなければ王や総督の前にイエス様のことを証しする機会などありません。その意味でイエス様のことを証しすべきキリスト者にとっては、イエス様の名のゆえに法廷に連れていかれることが積極的な意味を持つようになるということです。しかしいざ法廷に立たされたとき、私たちは何をどのように語ればよいのでしょうか。そのことについてイエス様は次のようにおっしゃっています。

21 章 14 節

「だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。」

王や総督の前に引き出されるとき、何を言おうか、どう弁明しようかと思い悩み、心配する必要はない。むしろ、弁明の準備や練習を前もってしないように心に決めなさい、とイエス様は言われるのです。それはなぜでしょうか。15 節でこう言われています。

「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」

ルカ福音書 12 章 11 節 12 節でも似たようなことが語られていました。

「会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう言い訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」

そこでは「聖霊が教えてくださる」と言われていました。しかし今日のところでは「わたしが」すなわちイエス様ご自身が言葉と知恵を与えてくださると強調されています。これは矛盾ではありません。復活し、天に昇られたイエス様が弟子たちに聖霊を注ぎ、その聖霊によって言葉（原文では「口」）と知恵を与えてくださる、ということです。しかもそれは「どんな反対者でも、対抗も反論もできないよ

うな言葉と知恵」です。イエス様は知恵に満ちておられる方ですが、そのイエス様ご自実際身が私たちにもそのような言葉と知恵を与えてくださる。これほど心強いことはありません。

そしてルカ福音書の続編である使徒言行録には実際ペトロやステファノといった弟子たちがそのような知恵を与えられ、堂々と反対者たちにイエス様のことを証ししたことが記されています(使徒 4:1-14, 6:10)。

２．忍耐によって命を獲得せよ

しかしそのように言葉と知恵をもって証しすることができるということは、そのことによって自分の命が守られ、保証されるということでは必ずしもありません。イエス様は続くところでさらに厳しい迫害があることを弟子たちに語っておられます。21 章 16 節

「あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。」

自分が信頼していた家族や友人からも裏切られる。敵に引き渡される。これは本当に辛いことことです。さらに「あなたがたの中には殺される者もいる」とイエス様は言われました。そして実際使徒言行録を読みますと、ステファノやヤコブが殺されてしまったことがわかります。また 21 章 17 節では「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる」とも言われています。イエス様の名のゆえに、イエス様を信じるがゆえにすべての人から憎まれ、嫌われる。そういう時が来ることをイエス様は告げられたのです。パウロも多くのユダヤ人から憎まれ、命を狙われることになりました。しかし弟子たちへの迫害は使徒言行録が記す初代教会の時代だけに限ったことではありません。もっと後のヨハネ黙示録が書かれた時代にはローマ帝国によるキリスト者への厳しい迫害、弾圧が行われていました。ローマ皇帝を神として拝まない者は皆剣で殺されたのです（黙示 13:10, 15)。私たちの生きる日本でも江戸時代にはキリスト教への厳しい迫害、弾圧が行われました。むごい拷問によって棄教を迫り、多くの人が命を落としました。またその拷問によって棄教し、信仰を捨てる人もありました。

先の戦時中にも国家神道に従わず、神社参拝をしない者は弾圧されました。

私たちは今はそのような迫害下にはありません。そのような迫害がもう起こらないでほしいと願います。しかし、もう起こらないという保証はありません。中国では今も政府が公認していない地下教会への厳しい迫害がんされ。多くの人が牢に入れられたり、行方不明になっています。日本ではもうそんな迫害は起こらないだろうと高を括ることはできないと思います。日本は右傾化、全体主義化が進んでいます。今話題となっている日本学術会の一部の学者が任命を拒否されたというのもその一例でしょう。拒否された６名の学者は、政治学、法学、歴史学、宗教学（キリスト教学）など、思想信条の自由、人権の尊重に関わる研究分野の学者たちです。そのような研究者たちの任命が、明確な理由の説明もなく拒否されたことは深刻な事態と考えられます。政府がしようとしていることに都合の悪い学者は予め排除しようとしているように思われます。自民党が目指している大きな目標は憲法改正です。そして自民党は改憲草案を出していますが、その内容は明らかに基本的人権や自由は制限しようとするものです。信教の自由も例外ではありません。どんどん暗い時代になっているようにも感じられます。キリスト者がキリスト者として考え、発言し、行動すれば、人々から白い目で見られ、かつてのように「非国民」と言われて嫌われてしまう。そのような事態になる可能性もあるのです。イエス様はそのような厳しい迫害下に置かれるであろう弟子たちに次のような慰めと励ましを語っておられます。21 章 18 節

「しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。」

しかしこの言葉は 21 章 16 節の「中には殺される者もいる」ということと矛盾しているにも思われます。私たちはこのことをどのように考えればよいのでしょうか。「あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない」という言葉ですが、これと似た言葉が 12 章 7 節でも使われていました。

「それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

その少し前の 12 章 4 節、5 節にはこう言われていました。

「友人であるあなたがたに言っておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方だ。そうだ。言っておくが、この方を恐れなさい。」

弟子たちを迫害する者は、体を殺すことができるかもしれないが、それ以上何もできない。すなわち魂、命を滅ぼすことはできない、ということです。それができるのは神様だけなのです。それゆえ、たとえ殺されたとしても、髪の毛一本もなくならない、滅びないということは、一見矛盾しているように思えるのですが、実は矛盾していないのです。死に至るような激しい迫害の中にあっても神様は私たちの髪の毛が一本も滅びることがないほどに、私たちの命、私たちの全体を完全に守ってくださっているのです。

それゆえ 21 章 19 節では次のように勧められています。

「忍耐によって、あなたがたは命をかち取りなさい。」

「忍耐」とは「下にとどまる」という意味があります。迫害や圧迫の下にあってもそこに踏みとどまる。迫害されたとしても、自分の場に、信仰に堅く踏みとどまる、ということです。しかし普通に考えれば、厳しい迫害下で命を守るためにはどうすればよいでしょうか。信仰を捨てればよいのです。そうすれば迫害されることも、殺されることもありません。命を守ることができるでしょう。しかしイエス様はそうは言われないのです。あなたがたは忍耐によって、信仰に踏みとどまることによって、命をかち取りなさい、と言われます。イエス様への信仰に踏みとどまることによってこそ、私たちは真の命、永遠の命を自分のものとして獲得することができるのです。そのために「忍耐」が必要なのです。しかしその忍耐も自分の力でできることではありません。イエス様が言われたように、髪の毛が一本も失われない程に神様が守ってくださるがゆえに、そしてイエス様がいつも共にいて必要な助けを与えてくださるがゆえに、私たちは忍耐することができます。そして私たちには死を越えた永遠の命と希望が与えられているのです。そのような希望に支えられて、私たちは忍耐によって、命を獲得したいと願います。そのようにイエス様が励ましてくださっているのです。